

# ALS進行抑制薬を治験

## 5月末まで BMの変化調査

徳島大学病院は、体が徐々に動かせなくなる難病「筋萎縮性側索硬化症(ALS)」の進行抑制が見込まれる薬剤の治験を始めた。患者に半年間投与して効果と安全性を検証。脳内物質の数値の変化などから、治療にどのくらい有効かを示す指標「バイオマーカー(BM)」を調べる。薬剤投与に伴うBMの変化と病状改善の関連性が認められれば、臨床での応用や病態の解明が期待できる。

治験は徳島大学病院を主幹施設として、県外2施設と共同で昨年9月から実施している。発症1年半以内の患者10人を目標に、今年5月末までの9カ月間行う予定。徳島大学病院では6人を受け入れる計画で、現在4人が参加している。

大日本住友製薬(大阪)が開発している内服薬「EP I-589」を1日3回(計1500ミリグラム)、約6カ月間投与し、呼吸機能や運動症状などの改善具合を確かめる。BMの調査では、投与時とその前後に測定した血液や髄液の数値、脳内化学物質の濃度などを比較。症状改善と、数値や濃度の変化との関連を検証する。

ALSは発症のメカニズムで分からない点が多く、有効な治療法は確立されていない。今回使う内服薬は米国で実施された治験では病気の進行を抑える可能性が示され、重篤な副作用も出なかった。このため国内でも治験を進めることにした。

徳島大学病院によると、ALSは脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患で、国の指定難病。発症原因は不明で、発症すると全身の筋力が低下する。次第に呼吸ができなくなり、3〜5年以内に死に至るケースが多い。1年間の有病率は人口10万人当たり5〜7人とされ、国内の患者数は約1万人、徳島県内は約80人。平均余命を約90日延長する内服薬「リルゾール」と、症状の進行を抑制する点滴剤「エダラボン」の2種類が承認されている。

ける患者2人を5月末まで募っている。治験の結果は国内外の学会や論文で発表する。和泉唯信医師は「薬剤の安全性と有効性を確認するとともに、BMの数値にどう作用するのかを明らかにしたい」と話した。

徳島大学病院は治験を受

# がん治療 地域差是正を

## 徳大病院でフォーラム

がん治療の取り組みについて紹介する  
宮本准教授―徳島市の徳島大学病院



徳島大学病院がん診療連携センターは7日、最新のがん治療について発表するフォーラム(徳島がん対策センター、徳島新聞社共催)を徳島市の同病院で開いた。新型コロナウイルス対策のため昨年に続き無観客で行われ、医師ら8人による講演をビデオ収録した。

3月22日以降、ケーブルテレビ徳島で放送される。徳島大大学院医歯薬学研究所の宮本弘志准教授(消化器内科学分野)は、同病院で検査した消化器系のがん79例中、20例が希少がんだったと紹介。このうち患者に治療法を提示できたのは9例で、治療施設が遠い

などの理由から治療に結びつかなかったのはわずかに1例だったことから、医療環境の地域間格差を是正するのが課題だと指摘した。

同病院薬剤部の柴田高洋薬剤師は、がんの薬物療法に用いられる抗がん剤の種類と副作用を紹介。特に一部の抗がん剤は正常な細胞も攻撃するため、副作用を自覚したら速やかに対処することが大切だとした。

3月13日付の特集面で詳細を掲載します。

(青木忍)